

琉球大学学術リポジトリ

中学生との交流をとおしたプロジェクトワーク： 初級レベル日本語クラスでの試み

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2008-07-03 キーワード (Ja): プロジェクトワーク, 異文化理解, 地域交流 キーワード (En): project-work, intercultural understanding, local exchange 作成者: 金城, 克哉, 副島, 健作 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6569

中学生との交流をとおしたプロジェクトワーク： 初級レベル日本語クラスでの試み

金城克哉・副島健作

要 旨

平成15年度前期のまとめの活動として初級レベルの日本語クラスでプロジェクトワークを行った。中学校を訪問し、留学生が自国について紹介するという活動である。本稿ではその過程について述べ、その後の留学生へのアンケート調査の結果をまとめ、地域との交流をとおしたプロジェクトワークの試みの教育的効果や問題点を検討した。調査の結果、留学生は今回のプロジェクトワークを高く評価していることがわかった。とくに、教室で学んだ日本語を応用したり、発表の技能を身に付けたりすることができたという言語技能が向上したという達成感が得られ、日本の中学生について知り、また自国を紹介することで、異文化理解が深まったと学習者が感じていることがわかった。一方で、1) グループ活動として適切なテーマ設定だったか、2) プロジェクトワークを行う時期として適切だったか、3) 発表の技能の指導が十分だったか、といった問題点も明らかになった。

キーワード：プロジェクトワーク, 異文化理解, 地域交流

1. はじめに

平成15年度前期の活動のまとめとして初級レベルの日本語クラスでプロジェクトワークを行った。今回のプロジェクトワークは中学校を訪問し、中学生たちに留学生が自国について紹介するという活動である。また、中学生たちもそれぞれのクラスで用意した歌、三線、エイサーなどを披露、発表し、お互いに交流をはかった。ここにこのプロジェクトワークの過程と活動後に行った留学生へのアンケート調査をまとめ、活動の方法や内容、教育的意義を検討する。

2. 経 緯

言語能力とくにコミュニケーション能力の上達には聞く、話す、読む、書くの4技能の総合的な養成が不可欠であることは言うまでもないが、こうした総合的な言語能

力の養成にプロジェクトワークが有効であることも倉地（1988）、倉八（1993）、金城（1994a, 1994b）、椿（1997）等に指摘がある。琉球大学でも同様の目的で共通教育科目で提供されている初級レベル日本語クラス（2クラス・計18名在籍）で学期のまとめの活動としてプロジェクトワークを実施している。昨年度の前期にはグループに分かれて留学生自らアンケート調査を実施し、発表会を開いたが、今回は初級の2つのクラスが合同でプロジェクトワークを行うことにした。活動内容は学外において地域の人々との交流を図るという目的で、小学校や中学校を訪問し、留学生たちの国について紹介を行うことができないか検討した。

そのように考えていたところ、宜野湾市立宜野湾中学校より、同中学校の総合的な学習の時間の一環として留学生との交流を図りたいとの申し出があり、今年度は同中学校訪問という形でプロジェクトワークを行うこととなった。

3. 準備段階

グループ編成については、留学生は各々出身地も異なるため、十分に協議し、1グループ2～3名から成る案を作成した（資料2参照。○のついた学生）。聴解の時間（レベル別に分かれている）を合同クラスとし、2つのクラスの留学生に対しプロジェクトワークのオリエンテーションを実施した。

学生はインターネット等を使って情報収集し、パワーポイントを用いて発表の準備をするなど意欲的に取り組んだ。韓国からの留学生が数名いたが、それぞれ内容が重ならないように指導を行った。また実際の発表を想定して原稿を準備し、スムーズに発表できるよう練習した。

4. 宜野湾中学校訪問・発表・交流

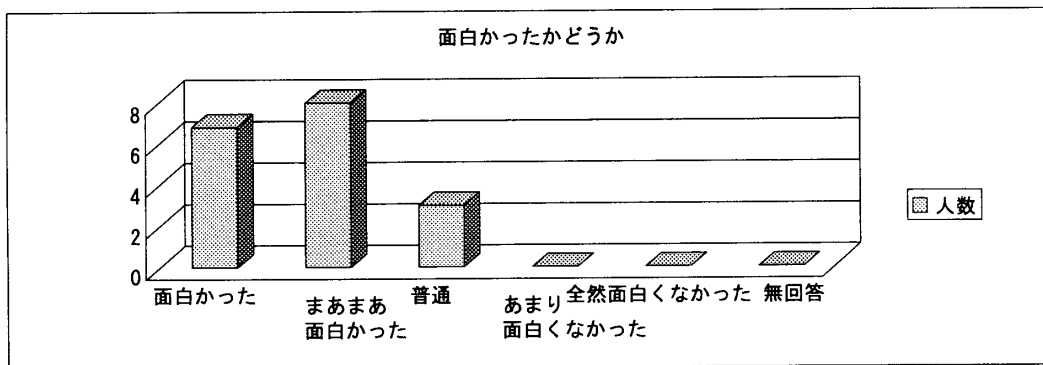
交流会前日、宜野湾中学校を訪問し、教室の状況を確認。中学校側と協力し準備を行った。当日の交流プログラムについては訪問先の教師と何度かやりとりをし、決定した。内容は添付資料1「国際交流学習タイムテーブル」（p.48参照）、実際の交流内容については添付資料2「国際交流学習交流グループ・クラス・担当教員組み合わせ表」（p.49参照）（宜野湾中学校より）のとおりである。

5. 留学生のアンケート調査結果

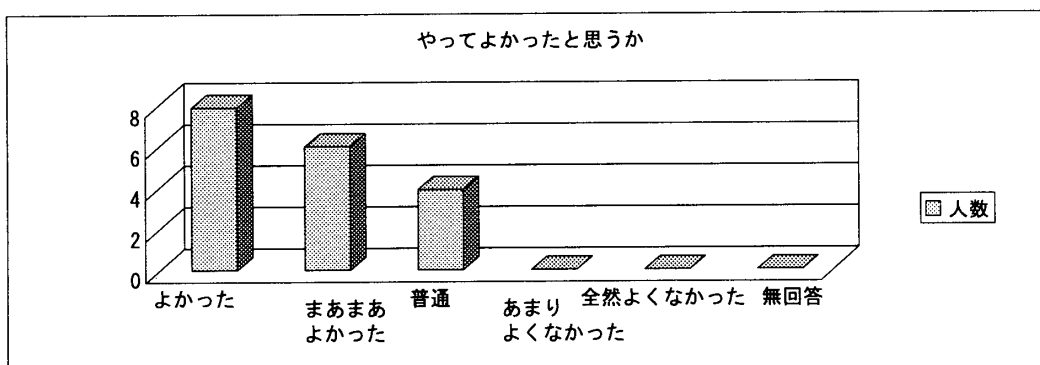
以下は今回のプロジェクトワークに参加した18名の留学生を対象にプロジェクトワー

クについての評価を実施した結果である。(1)~(7), (9)~(11)①, 12の質問項目についてはグラフ左から順に5段階評価, 質問項目(8)と(11)②, ③は自由記述方式とした。

(1) 「面白かったかどうか」についての項目：



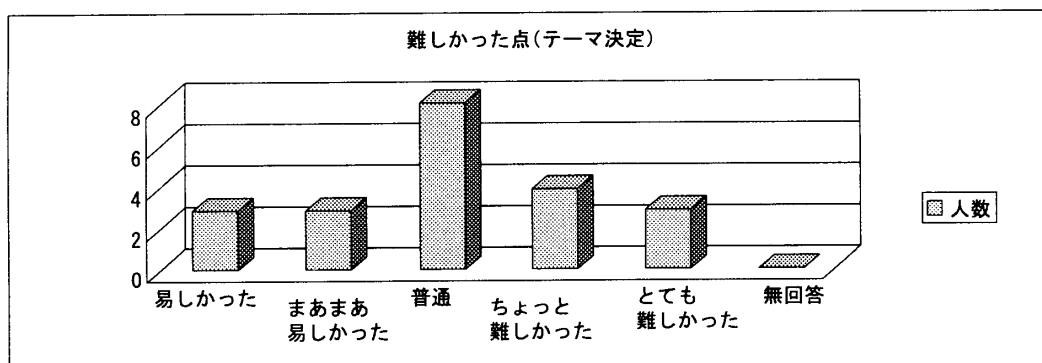
(2) 「やってよかったと思うかどうか」の項目：



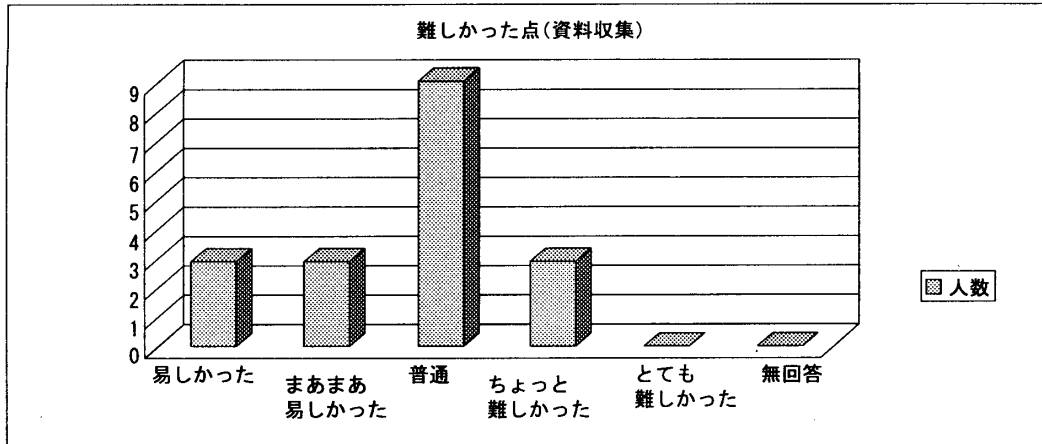
全体の約80%がこの活動の全体的印象を「面白い」、「やってよかった」と感じている。内容と満足度において高く評価していることがわかる。

(3) プロジェクトワークで難しかった点について：

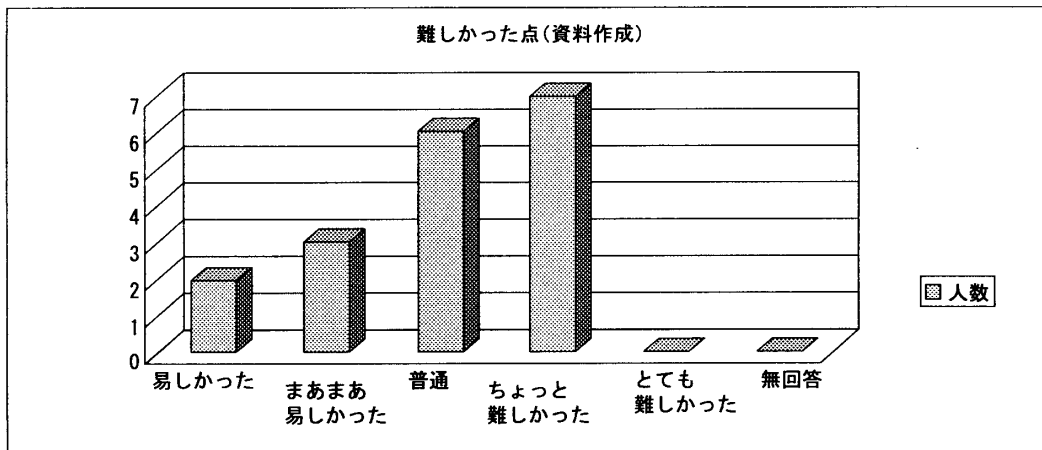
① 「テーマ決定」：



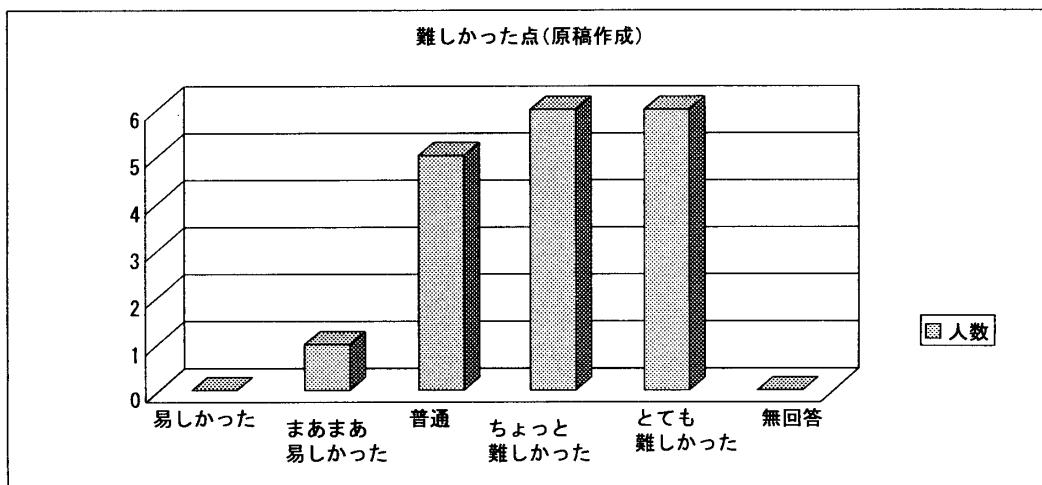
② 「資料を集める」：



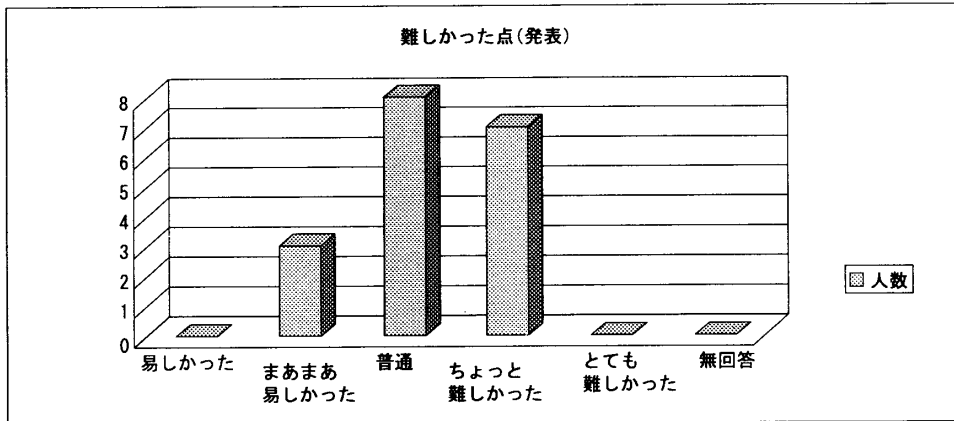
③ 「発表の資料を作る」：



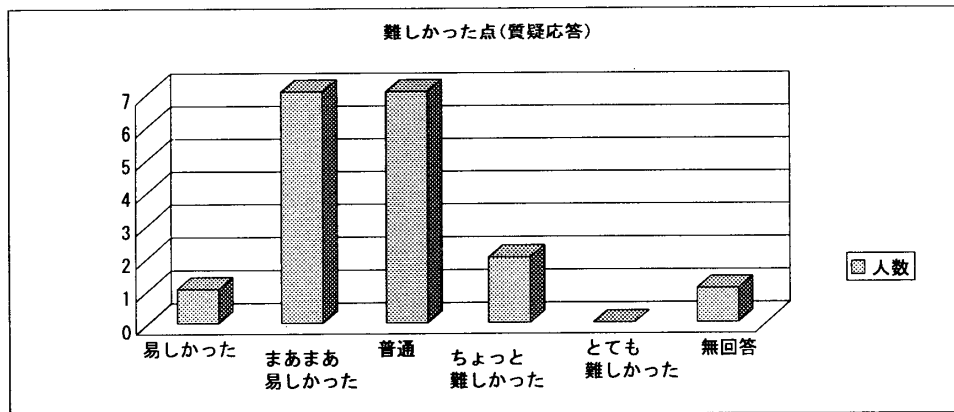
④ 「発表の原稿を書く」：



⑤ 「発表をする」 :

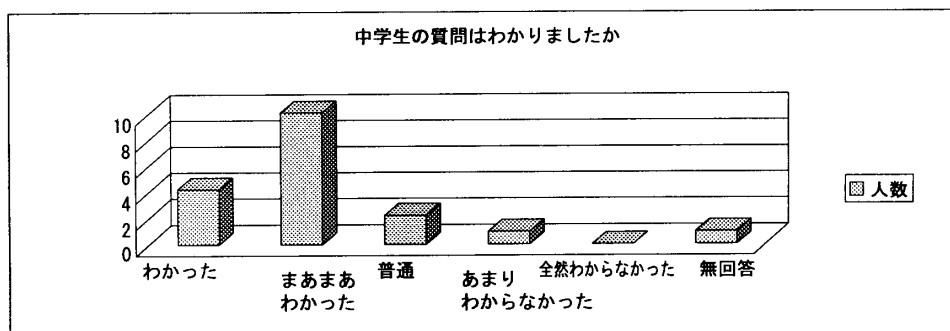


⑥ 「質問を受ける」 :

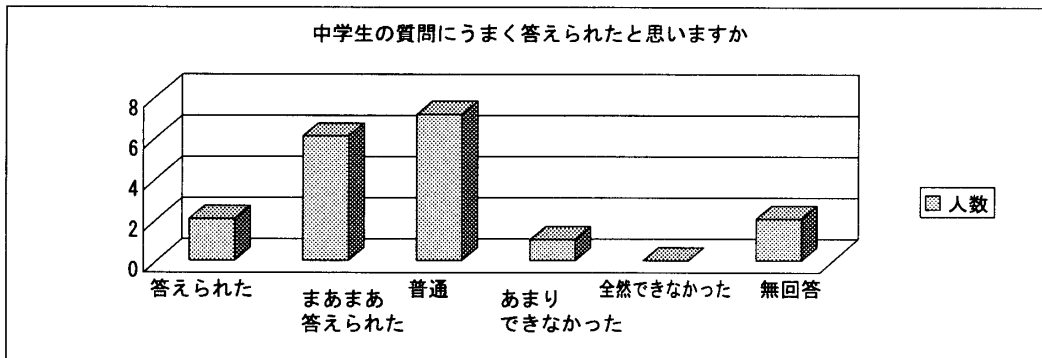


活動内容については、発表資料の作成 (38%)、原稿書き (66%)、発表する (38%) の点で難しいと感じる学生の割合が高くなっているが、これは学習者の日本語レベルと活動内容にかなりのギャップがあったためであると考えられる。これに関しては第7節でも述べる。

(4) 「中学生の質問はわかりましたか」 :

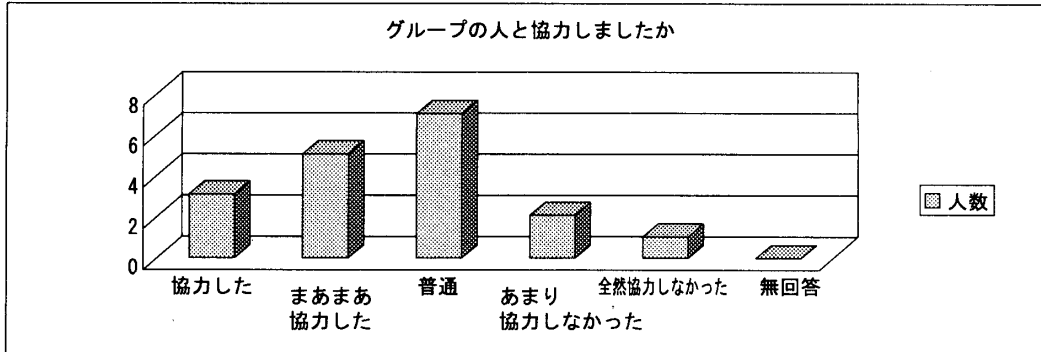


(5) 「中学生の質問にうまく答えられたと思いますか」：



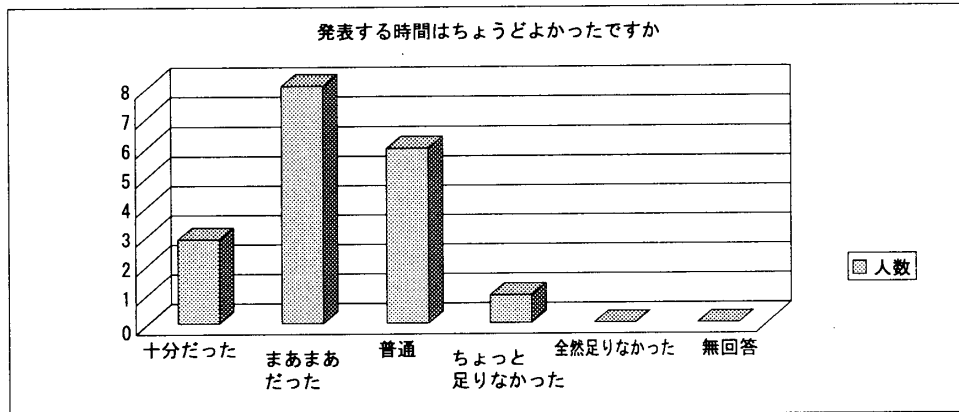
発表後中学生と直にコミュニケーションをとるとい活動が含まれているが、中学生の質問がわからなかったり、質問にうまく答えられなかった等、自己評価が低い学生は1割にも満たなかった。これは学習者が自分の発表内容について事前に下調べを行い、様々な知識を持っていたために十分余裕を持って受け答えができたからではないかと考えられる。

(6) 「グループの人と協力しましたか」：



グループの仲間同士での協力について、約16%が協力しなかったと答えている。当初、グループ内での学習者間の日本語力にギャップを設け、協力せざるを得ないような状況を作ること検討したが、資料収集から発表原稿作成までインターネットや本・雑誌等からの情報収集については個人レベルでの作業が多く、また発表原稿の作成でもグループメンバー同士よりはインストラクターへまず質問をして、原稿をまとめるという作業が主となってしまったため、個別の作業に力点が置かれてしまった。

(7) 「発表をする時間はちょうどよかったですか」：



(8) 「何が困りましたか。どんな時に困りましたか」の項目は記述式で回答させた。その結果、「困りませんでした」という答えもあった一方、準備段階で困ったこととして、次の4つが挙げられた。

- ・「発表の原稿を書くのが難しかった」
- ・「自分のパソコンがないので準備が大変だった」
- ・「日本語がよくわからないから翻訳するのが難しかった」
- ・「準備期間がとても長かった。授業もちゃんとできなかった。短期間で準備すればもっとよかったのではないか」

当日の発表で困ったこととして、次の4つが挙げられた。

- ・「日本語で説明するときに困った」
- ・「発表者が4人いて（時間がなかったので）中学生から質問を受けられなかった」
- ・「学生たちから質問されたとき知らない単語が出てきて困った」
- ・「中学生の話すスピードが速くて（聞き取るのが）難しかった」
- ・「中学生の言葉は教室で習う言葉とは全然違っていたので理解するのが難しかった。でも、発表はとても楽しかった」
- ・「発表の時自分の言うことを忘れてしまって恥ずかしかった」

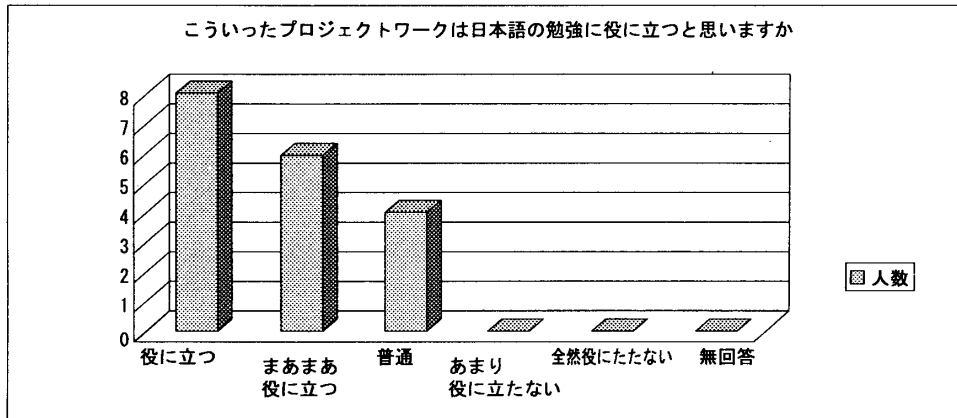
上記以外にも、次のように発表以外の活動で困ったことをあげる者もいた。

- ・「昼ごはんを食べる時に困った。残すのはすまないと思って無理して食べた」
- ・「学生達とゲームをしたが質問がよく理解できなかった」
- ・「最後の（中学生代表の）スピーチは難しかった」

また、次のような反省点をあげる学生もいた。

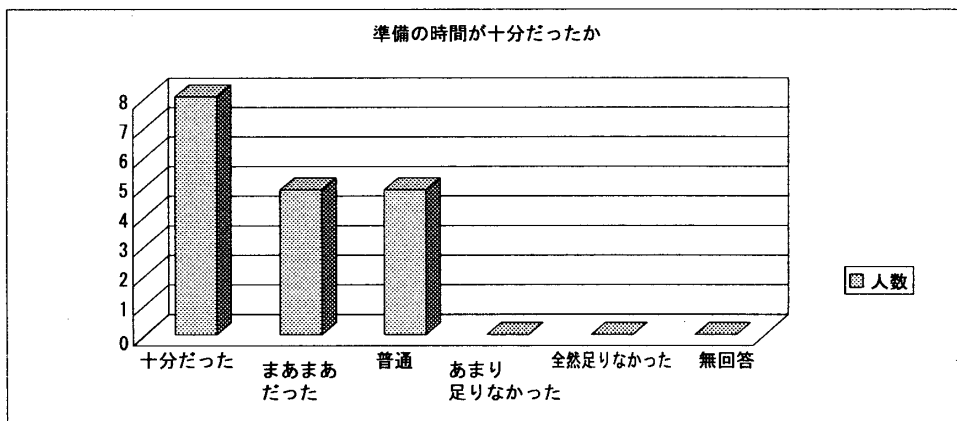
- ・「料理を作ったが、自分でもどんな味になるのかわからなかった」
- ・「(プロジェクトワークの) 内容は自分の日本語のレベルには複雑すぎた。1年勉強してから最後に同様のことをやればもっとたやすくできたかもしれない」

(9) 「こういったプロジェクトワークは日本語の勉強に役に立つと思いますか」：

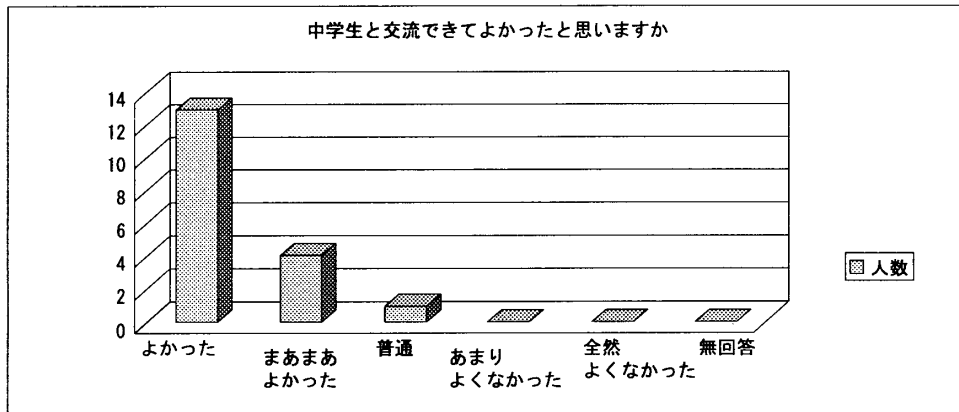


今回、自国の文化や歴史・風土といった事柄の情報収集を行ったが、その段階ではまだ母語での作業が主となっていた。次に資料をまとめたり、発表原稿を書いたり、質問への受け答えを考えたりする段階において、必然的にインストラクターから日本語でアドバイスを受け、まとめ、書くという作業へつながっていった。また、生の日本語に触れる機会がもてたことで、通常の教室での日本語とは違った日本語に接する機会に恵まれたことが日本語の勉強に役立つ（77%）という高い評価につながったと考えられる。

(10) 「準備の時間が十分だったか」：



(11) ① 「中学生と交流できてよかったと思いますか」：



② 具体的なよかった点：

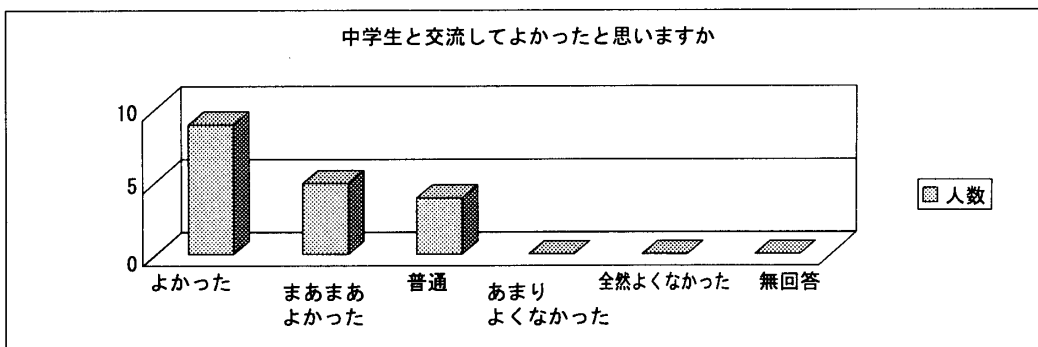
- (a) 中学生と日本語で話したので練習になった。
- (b) 会話体の日本語が学べたこと。
- (c) 中学生が使っている言葉がわかるようになってよかった。
- (d) 日本語の会話が上達する。
- (e) プロジェクトワークとスピーチはよかった。大勢の前で話す練習になった。
- (f) 日本語で発表したから自分に自信がついた。
- (g) みんなの前で話すのは怖かったが、それを克服できた。
- (h) 普段は中学校に入ることができないから、いい経験になった。
- (i) 中学生にとっては異文化に接するようになるのはいいことだと思う。
- (j) 沖縄の学生の学校生活が学べた点がよかった。
- (k) 中学生だからいたずらっ子が多く、でもかわいかった。私達のためにいろいろ用意してくれてありがたいと思った。
- (l) 日本の学校や学生たちと直接会い、経験できて、また、実際の日本語の速さで発音を聞いてよかった。
- (m) 中学生だからかわいかった。早く親しくなれた。住所も教えてもらって手紙も送るつもりだ。
- (n) 韓国と異なる点が見られた。
- (o) 中学生の環境がわかるようになってよかった。
- (p) 自分の国と沖縄の文化のこととそれぞれの文化の違いがわかるようになった。
- (q) 自分の国の発表ができてよかった。

- (r) 日本人に自分の国のことを教えられたこと。
- (s) 自分の国を大切にしなければならないと感じた。
- (t) 私は中学生に私の国のことを話した。そして私は中学生と日本語を練習した。

③ よくなかった点：

- ・ グループを作った意味がない。全部一人であるから。
- ・ 作った資料を一度消してしまったことがよくなかった。
- ・ 中学生があまり質問してくれなかった。
- ・ 翻訳する時間が足りなかった。準備の時間が足りなかった。
- ・ 準備を手伝ってくれた先生方と一緒に発表することができなかった。
- ・ 学生の言葉がきれいではなかった。他の教室の音も聞こえて学生はあまり集中していないようだった。
- ・ 他のグループの音が聞こえて集中できなかった。
- ・ ゲームは人が多すぎてそんなに面白くなかった。みんなで参加するのが大変だった。
- ・ 準備時間が長かった。
- ・ みんな恥ずかしがりやであまり話ができなかった。
- ・ 色々紹介したいことはあったが、料理のことしか話せなかったのが残念。
- ・ 1日だけだったのが残念。

(12) 「午後の中学生との交流はどうでしたか」：



6. 教育的効果

今回の取り組みで最大の収穫は、大学外で日本人と触れ合う機会を得たというところにある。学習者は日本の大学で学んでいるにも関わらず、日本人学生と触れ合う機会は必ずしも多くない。一般の日本人とはなおさらである。昨年度までも学内の日本人を対象としてプロジェクトワークの発表会を行っていた（金城・與那覇2002）が、聞きにきてくれる学生は通常、何らかの形で留学生のサポートをしてくれる者ばかりで、「交流」という観点からいえば、新しい人的交流を生み出すには至らなかった。こうした問題点に鑑み、中学校の協力を得て、地域の日本人との交流を推進してきたことは双方の学生にとっていい機会であった。

留学生に対して行ったアンケート調査の結果によると、留学生は今回の中学校訪問並びにプロジェクトワークを高く評価していることがわかる。調査項目(11)「中学生と交流できてよかった」あるいは「まあまあよかった」思う学生が17人（94.4%）いたという結果は今回のプロジェクトワークが地域交流の一環として高く評価された結果である（cf.pp.43-44）。では一体どんな要因がよかったと評価されたのだろうか。言い換えるなら、どういう教育的効果があったと学習者は感じているのだろうか。

その教育的効果を探るため、調査項目(11)に対して、「よかった」と回答した学習者のコメントを内容別にまとめると、以下のようになる。ここから本プロジェクトワークを通して学習者が得た満足感、達成感の要因を読み取ることができる。

- ① 教室で学んだ事項を一般の日本語使用場面で応用することができた：(a)－(d)
- ② 初めて会う人々に対して日本語で発表することができた：(e)－(g)
- ③ 日本の中学校の様子を知ることができた：(h)－(p)
- ④ 自分の国を少しでも理解してもらうことができた：(q)－(t)

このように、地域との交流を通してのプロジェクトワークでは、言語技術の側面で、①教室で学んだ日本語を応用したり、②発表の技能を身に付けたりすることができた、という言語運用能力向上の効果だけでなく、③日本の中学生について知り、また④自国を紹介する、という異文化理解の側面でも一定の効果があったと学習者が感じることが、調査結果からうかがえる。

7. 今後に向けての改善点

今後このように地域との交流を進める上で次の3つの点が改善点として挙げられる。

- ① 今回プロジェクトワークを進めていくうちにグループとしてのまとまりが薄

れたということがあった。1人1テーマ（食文化や音楽等）というプロジェクトワークの性格上、自分の発表準備に追われグループのメンバー同士が協力することができなかった。今後はグループで活動する場合はメンバーの協力を促すようなテーマ設定等を行うことが重要である。

- ② クラスが始まって2ヶ月あまりと短かったため、十分な日本語力が身につけていない状態でプロジェクトワークに取り組むことになり、ゼロ初級から日本語学習を始めた学生には少々高度な活動となった。（調査項目③～⑤で半数ほどの学生が「まあまあ難しかった」と回答していることを参照）今後は初級の学生のプロジェクトワークを行う時期やレベルに合った活動についても検討すべきである。
- ③ 発表の原稿を書く作業について約3分の2の学生が「難しかった」もしくは「まあまあ難しかった」と答えている。初級ではまだまとまった文章を書くことができない段階であったことが要因の一つだと思われる。今後は短文作成練習ばかりではなく初級段階からある程度まとまった文章を書く力を身につけさせる指導が必要である。

8. まとめ

留学生に対して行ったアンケート調査の結果、留学生は今回の中学校訪問並びにプロジェクトワークを高く評価していることがわかった。その理由としては、教室で学んだ日本語を応用したり、発表の技能を身に付けたりすることができたという言語技能が向上したという達成感と、日本の中学生について知り、また自国を紹介することで異文化理解が深まったことがあげられる。しかしながら、第7節で述べたように改善すべき点もある。このような点をあらため、来年度以降もこのような活動を続け、地域との交流を通し、日本語を実際に使う場を作り、留学生と日本人生徒の異文化間交流や異文化理解教育につなげていきたい。

参考文献

- 金城克哉・與那覇麻子（2002）「初級日本語教育におけるプロジェクトワークの実践」.
『琉球大学大学教育センター報』. 第6号, 19-23
- 金城尚美（1994a）「四技能を統合した日本語教授法：プロジェクトワーク」. 『言語文化研究紀要』 第3号. 琉球大学教養部, 53-86

- 金城尚美 (1994b) 「異文化間コミュニケーションとしての日本語教育：プロジェクトワークにおけるインターアクション」. 『沖縄キリスト教短期大学紀要』第23号. 沖縄キリスト教短期大学, 145-154
- 倉地暁美 (1988) 「中級学習者の日本語日本事情教育におけるグループ研究のプロジェクトの試み」. 『日本語教育』66号, 48-62
- 倉八順子 (1993) 「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識に及ぼす効果：一般化のための探索的研究」. 『日本語教育』80号, 49-61
- 椿由起子 (1997) 「プロジェクトワークの実践」. 『上級日本語教育の方法』藤原雅憲・靱山洋介編. 凡人社, 231-247

(金城－琉球大学法文学部, 副島－琉球大学留学生センター)

「国際交流学習」タイムテーブル		7月2日(水)					
時間	日程	1組	2組	3組	4組	5組	6組
		留学生	留学生	留学生	留学生	留学生	留学生
8:15	出席点検 朝の会						
8:25	(職員朝会)						
8:30	各クラス準備	9:30 迎え出発 10:00着	9:30 迎え出発 10:00着	9:30 迎え出発 10:00着	9:30 迎え出発 10:00着	9:30 迎え出発 10:00着	9:30 迎え出発 10:00着
10:00	(移動)						
10:15	多目的ホール集合 ※諸注意など	10:10 出発 10:35 到着	10:10 出発 10:35 到着	10:10 出発 10:35 到着	10:10 出発 10:35 到着	10:10 出発 10:35 到着	10:10 出発 10:35 到着
10:45	歓迎セレモニー	入場 自己紹介	入場 自己紹介	入場 自己紹介	入場 自己紹介	入場 自己紹介	入場 自己紹介
11:25	(移動)						
11:35	クラス交流会1	バウホール ト発表	バウホール ト発表	バウホール ト発表	バウホール ト発表	バウホール ト発表	バウホール ト発表
12:35	給食						
1:20	(休息・準備)						
1:30	クラス交流会2	沖繩のまつり(3-1) ・エイサーと空手 (多目的ホール) ・各班での交流(3-1)	三輪演奏(音楽室) ・班対抗野球大会 交流会(運動場)	昔の遊び(体育館) ・琉球のお菓子で交 流会(体育館前)	ゲーム・色おに等 (3学年メデアア) ・クイズ(教室)	押し合いすもう (2学年メデアア) ・カンけり(2年ア) 7又は、多目的ホール ・和菓子パーティー(2-6)	沖繩料理(調理室) ・交流会(教室)
2:50	(移動)						
2:55	お別れセレモニー	多目的ホール	多目的ホール	多目的ホール	多目的ホール	多目的ホール	多目的ホール
3:30	お見送り (後片づけ)	送り出発	送り出発	送り出発	送り出発	送り出発	送り出発
4:00	帰りの会						

国際交流学習メンバー配置計画
「国際交流学習」交流グループ・クラス・担当教員 組合せ表

テーマ	留学生氏名 (○は発表者)	留学生発表形態	備考	交流学級	中学校職員	琉球大学教員
1 地理 (環境問題)	○上地 勝 レナット (ブラジル) ○チョウ レイホウ (中国) リン ヤンファ (中国) ○キム キョンフ (韓国)	パワーポイント		3年4組	平良 誠 (担任・国語) 新垣妙子 (理科)	石原 嘉人
2 音楽	○ユン ビョンヨン (韓国) ○福岡 スエ カリーナ (ブラジル) フェングスリ ファーウム (タイ) タエチャアラサウイタヤ アラヤ (タイ) シグリッド ホフメイスター (オーストリア)	パワーポイント	DVDやCD を使用予定	3年2組	松堂綾子 (担任・音楽) 山川米子 (音楽)	赤嶺 美恵子
3 観光地と祝祭日	○小暮 ビグン (タイ) キイーラテイボン スリタンヤラット (タイ) ○イ ソクソン (韓国)	パワーポイント		3年5組	当山さゆり (担任・体育) ジヨンソク みゆき (英語)	金城 かおり
4 生活 (民族衣装ほか)	○チャ ミリム (韓国) ○セシリア エステファニア ペトゥラ (アルゼンチン)	パワーポイント		3年6組	松尾宏一 (担任・数学) 渡慶次勤子 (家庭科)	金城 克哉
5 観光 (祭り)	○新垣 セス リョウ (アメリカ) タヘリ ジャホン ソルタ (アメリカ) ○バク ファーオ (韓国) ○コー チューホイ (マレーシア) ウラダリ フェニイ (インドネシア) スリスライヨ (インドネシア)	パワーポイント	可能なら、 簡単な料理 を実際につ くってみた い。	3年1組	宮城節子 (担任・美術) 親富祖成信 (技術)	新城 志磨子
6 多文化	○比嘉 敬弘 セルヒーオ (ポリビア) ○リヤ ヤダオ ラグード (フィリピン) ○仲村 オロスコ リカルド きよし (メキシコ) エオラダ マレレ マリエ (パプアニューギニア) ポーカー レスリアン (アメリカ)	パワーポイント		3年3組	宮城秀樹 (担任・社会) 新垣和子 (数学)	與那覇 麻子

A Project-Work with Junior High School Students : A Case Study of Basic-Level Japanese Language Learners

KINJO, Katsuya
SOEJIMA, Kensaku

Keyword : project-work, intercultural understanding, local exchange

Abstract

At the end of the spring semester of 2003, the basic-level students engaged in a project-work activity : they visited a junior high school and gave presentations on their own countries. This paper reports the results of questionnaire analysis and considers the educational effect of this kind of activity and its problem. The results clarified that the students highly evaluate this activity : they feel that (i) their command of Japanese have improved — they could use what they had learned in the classroom and they could learn how to give presentations in Japanese, and (ii) their intercultural understanding has deepened through Junior high students' presentations. Meanwhile, the following problems have emerged : (i) were their themes suitable for group activity? (ii) was the time of this project-work appropriate?, and (iii) have the instructors given enough instructions to them? Notwithstanding the above points, this project could be improved to be a part of our curriculum in the future; it is to be desired that cultural exchange between the international students and the local community should be promoted from the next year on.

(University of the Ryukyus)